３・４・１１号線橋梁の建設が猛禽類に及ぼす影響

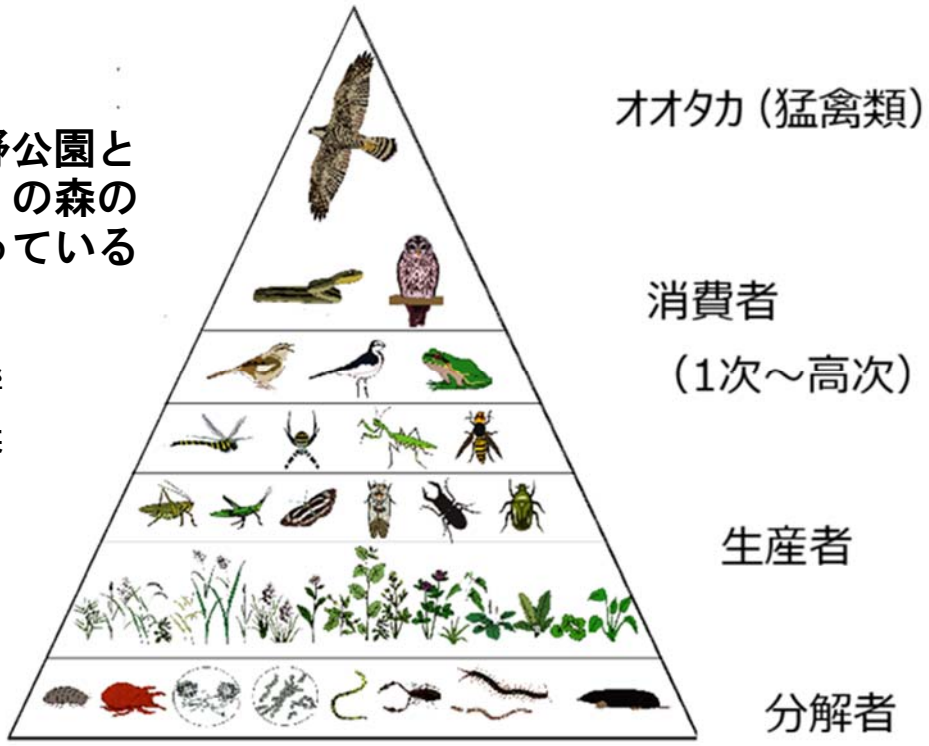
１．東京都の猛禽類調査結果の概要

ハケの森と野川と草原の実面積（芝生地や孤立樹木を除く）は１００ha には及ばない〝狭い地域〟ですが、３つの生態系が連続しており、その複合効果によって、多くの種が生息しています。その豊かな生態系の頂点にオオタカが生息しています。豊かな生態系が、多様で多量の餌生物を必要とする猛禽類の生息を可能にしているのです。

北南建が令和５年に実施した猛禽類調査によると、ハケの森と野川の区域（小金井新橋～富士見大橋）には、９種 の猛禽類が確認されています。

生態系は武蔵野公園と野川公園と ICU の森の３域で成り立っている

下部構造への影響は上位生物に兆候が表れる



２．オオタカが生息していることの意味

オオタカのような捕食者は、生態系ピラミッドの頂点に位置します。
生態系ピラミッドで、オオタカのような高次消費者が生存するためには、広大な土地、豊かな植物や動物が必要です。オオタカが生きてゆくためには１００～２００ha 以上の土地と豊富な動植物が必要だといわれています。 この狭い地域に、オオタカのような高次消費者が存在していると言うことは、この地域が、自然環境の質・量が良いといことを証明しています。

３．オオタカはアンブレラ種オオタカはアンブレラ種と言われます。アンブレラ種は、生態系の傘下の多くの生物の食物連鎖によって命を維持できています。オオタカが生息しているということ

は、その下位の生態系が豊かだと言うことでもあります。オオタカを保護することは、オオタカが生息する地域に棲む他の多くの種や生息地を、同時に保護する効果を持ちます。

４．オオタカは絶滅危惧Ⅱ類

この地域のオオタカは、絶滅危惧Ⅱ類に指定されており、保護が求められています。
この地域に生息する９種の猛禽類が、全て絶滅危惧種に指定されています。

タカ科	オオタカ	タカ属	VU	中～大型で、森林内で鳥類を中心に狩りをする。
	ハイタカ	タカ属	VU	中型で、オオタカとツミの中間的な存在。鳥を狩る。
	ノスリ	ノスリ属	VU	中型で、開けた場所でネズミや小動物を狩る。ホバリンも得意。
	サシバ	サシバ属	CR	比較的小型で、カエルやヘビ、昆虫などを狩る。渡り鳥。
	ツミ	タカ属	VU	小型で、主に小鳥を狩る。
ミサゴ科	ミサゴ	ミサゴ属	VU	魚食性で、水面に急降下して獲物を捕らえる。
ハヤブサ科	ハヤブサ	ハヤブサ属	VU	高速で飛翔し、主に鳥類を空中または急降下で捕らえる。
	チョウゲンボウ	ハヤブサ属	VU	小型で、ホバリングしながら昆虫やネズミを探す。
フクロウ科	フクロウ	フクロウ属	VU	夜行性の猛禽。主にネズミや小動物を狩る。

CR　絶滅危惧ⅠA類　　VU　絶滅危惧Ⅱ類

絶滅危惧Ⅰ類（CR, EN）：ごく近い将来、野生での存続が困難なもの。
絶滅危惧Ⅱ類（VU）：現在の圧迫要因が引き続き作用する場合は、近い将来、
危惧Ⅰ類に移行することが確実である。
準絶滅危惧（NT）　：生息条件の変化によっては絶滅危惧として上位ランクに移行する。

５．８３種もの危惧種

この地域全体の生態系は多様ですが、８３種が、レッドリストでなんらかランクの危惧種に指定されており、生態系は極めて脆く危機的な状況にあります。

武蔵野公園域と野川公園域は微かに繋がっているだけ。

西武多摩川線と多数の高圧線群は、生物の移動を**厳しく制限する障壁**となっています。
アナグマなどの動物は、ICU の森から武蔵野公園方面へ移動することが困難な状況です。
サギ類やカワセミといった水鳥は、多くの橋梁の下を潜り抜け二枚橋を上流へ遡上しています。
少数の大型野鳥は、上空を往来していますが、多くの野鳥は、餌場を求めて西武多摩川線の高い土手や多数の高圧線の下を縫うようにして飛来しています。
これらの動物は、二枚橋周辺の人の気配を警戒しながら移動しているのが現状です。
これは、**餌場が少ないことの証明**です、これが**絶滅危惧種に指定されている背景**です。

生態系の頂点に位置するオオタカなどの猛禽類は、「辛うじて生き長らえている」と言う状況です。この状況の生態系を道路橋梁で分断すると、どの様な事態に至るか明白です。

３・４・１１号線の橋梁建設が始まれば、高圧線の移動、橋梁の擁壁、橋脚など、架橋まで長時間にわたり閉ざされます。
この橋梁は、傾斜構造であり、登坂車線になります。
建設後は、排気ガス、騒音、振動、粉塵、照明による光害、日陰化など多くの影響が生物の生存を脅かします。

この新たな分断は、景観だけでなく、生態系を著しく衰退させることになります。
そして、この影響は永遠に続き、一度失うと、二度とは再生できないのです。
そして、辛うじて生き長らえているオオタカや他の猛禽類は、
この地域から絶滅するでしょう。

■ 自然再生事業と武蔵野公園に及ぼす影響

・ 自然再生事業への影響

野川の自然再生事業は、失われた過去の自然環境の回復を目指しています。 ２０年以上に及ぶ取り組みにより、過去に失われた生物が蘇り始めており、それを求めて水鳥も飛来しています。
この再生された環境が損なわれてしまえば、再生された生物も生存が困難になります。
また、再生が期待されている生物は、その生息の機会を永久に失うことになります。

・ 武蔵野公園への影響

都市計画道路の擁壁と道路による武蔵野公園の分断は、静かな佇まいと豊かな自然環境を消滅させるでしょう。
その結果、都民が憩い、安らげる環境は失われ、野生動物は貴重な生息地を奪われます。
公園の整備目標である「武蔵野の原風景」とはかけ離れた、騒音と排ガスに満ちた煩雑で不快な環境へと変貌するでしょう。
静かで緑に包まれた公園環境の価値は著しく損なわれ、武蔵野公園の魅力は大きく低下します。この道路による分断は、公園の本来の機能を根底から覆すものです。